

ITP-EUROPA 派遣報告書

氏名 太田 悠介（博士後期課程）
派遣先 パリ第8大学
派遣期間 2012年10月1日から2013年6月30日
研究テーマ エティエンヌ・バリバールの思想における大衆論

派遣の概要および成果

報告者は上記の期間において、パリ第8大学で研究課題「エティエンヌ・バリバールの思想における大衆論」を実施した。1942年生まれの哲学者エティエンヌ・バリバールの思想からは国家論や共同体論など、多岐にわたるテーマを導出することが可能であるが、バリバールは主としてスピノザに由来する「大衆（masses）」概念を用いることによって、国家や共同体が成立する以前の原初的な集団性を問題としている。この概念をマルクス主義の「階級（classes）」概念、あるいは政治哲学の「人民（peuple）」概念と照らし合わせることで、国家や共同体の問いを含む広義の「政治」を論じるにあたって新たな視座を設定することが期待される。本研究はこのような全体的な見通しのもとで、研究を進めてきた。

報告者は上記の研究課題に関する博士論文を執筆しており、本年度はこれに関連する個別の論点を投稿論文等にまとめて発表し、論点のさらなる精緻化をはかるという手法を採った。報告者は2009年にパリ第8大学への留学を開始したが、とりわけ昨年度はフランス語での研究が進んだ半面、日本語での研究成果の公表が不十分であった。そこで、本年度は博士論文と並行して日本語での投稿論文を執筆することで、この反省を生かすように努めた。

執筆した投稿論文は、「階級から大衆へ——エティエンヌ・バリバールのイデオロギー論をめぐって」（『クアドランテ』、東京外国語大学海外事情研究所、第15号、209-222頁、2013年）および「矛盾と暴力——エティエンヌ・バリバールの政治哲学序説」（『社会思想史研究』、社会思想史学会、第37号、2013年秋刊）の二点である。バリバールの大衆論はマルクス主義の全体性に対する批判という側面を有しており、とりわけマルクス主義の階級概念からいかに距離をとるかという点が重要な位置を占める。「階級から大衆へ」論文においてはマルクス主義のイデオロギー論を、「矛盾と暴力」論文においてはレイシズムの問題を精査することを通じて、この点を考察したものである。

また、本年度の派遣期間中には、商業誌に二件の記事を執筆した（「ポピュリズムと「人民（ピープル）」のかたち」、『現代思想』、青土社、第41巻第2号、246頁、

2013年2月および「大衆の情念のゆくえ——アントニオ・ネグリとエティエンヌ・バリバルのスピノザ論」、『現代思想』、青土社、第41巻9号、144-155頁、2013年7月)ほか、前年度と同様にフランス語での口頭発表および論文の執筆も継続して行った(« La philosophie politique chez Étienne Balibar », International Conference of ITP-EUROPA, Hildesheim University, 2012年11月24日ほか三件)。

今後の課題

上述のように、本年度は日本語での投稿論文の執筆を重点的に行った。その結果、博士論文執筆に必要な論点を相当程度整理することが可能となった。今後は、本年度に扱った論点あるいは題材を、ふたたび博士論文に盛り込む作業を継続して行う。これまでの研究を博士論文に組み入れるには、さらなる加筆および修正が必要となるため、この点に集中的に力を注ぐことに努める。